

## 谷崎潤一郎全集逸文及び関連資料紹介

細江 光

此の度、谷崎全集の逸文および谷崎関連の資料若干を発見入手したので、ここに紹介しておく。なお、翻刻の際、本文に手を加える事はしなかった。

### 1. 「最も面白い小説」

これは、昭和三十一年一月から配本を始めた東京創元社の『世界推理小説全集』（第一期全二十八巻）の内容見本に掲載されたものである。内容見本の発行期日は不明だが、昭和三十一年の十二月と推定される。他に「監修者のことば」を江戸川乱歩・植草甚一・大岡昇平・吉田健一が、「世界推理小説全集」によせて「を小泉信三・椎名麟三・西川正身・羽仁説子を書いてい

る。

谷崎が本文中で、〈全巻を通じて推理小説の構成技法の発達が窺知できるやうに編集されてある〉と言っているのは、この全集が、代表的な作家・名作を選んで、おおむね年代順に編集したものだからである。

ところで、谷崎が、若い頃からポーやコナン・ドイルを愛読し、自らも推理小説的な作品を書いて来た先駆者の一人である事、ストーリー・プロットを一貫して大切にして来た作家である事などは贅言を要すまい。しかし、昭和十年代・二十年代の谷崎は、推理小説への関心を失っているように見えていた。それが、昭和三十年頃から関心が蘇って来て、「過酸化マンガン水の夢」「鍵」「残虐記」「夢の浮橋」「瘋癲老人日記」へと繋

って行くのは興味深い。勿論、推理小説の流行や、文壇における復讐なども関係しているであろうが、ミステリー・マニアで、ハヤカワ・ポケット・ミステリー・ブックスを全巻揃えていたという千萬子の影響もあるのかもしれない。

なお、中津原睦三編『出版内容見本書誌』によれば、谷崎は、同じ東京創元社の『世界大ロマン全集』の内容見本（昭和三十一年八月）にも、『編輯に独自の風格』と題した推薦文を寄せている。また、山田和幸氏の調査によつて、昭和三十一年九月十三日の『毎日新聞』に、同全集に対する谷崎の次の様な推薦文が掲載されている事が判明した。

（興味津々たる古今の名作を集めたこの全集は、筋の面白さはもとより、本邦初訳の怪異譚や冒険小説までも含まれて、編集に独自の風格あり、多数の読者を魅惑するものと思はれる。）

\* \* \* \* \*

## 最も面白い小説

谷崎潤一郎

小説の面白さと云ふものは、いろいろの種類に考へることができるけ

れども、やはりプロットやストーリーの面白さと云ふことが第一になるのではないか。さう考へるならば、この面白さを極度に發揮した小説即ち推理小説と云ふものは、近代小説のうちで最も面白い小説であると云へよう。創元社版の世界推理小説全集は、推理小説のなかでも屈指の名作と呼ばれる作品を揃へてゐるので、読んで楽しいことは予想されるが、全巻を通じて推理小説の構成技法の發達が窺知できるやうに編集されてあることは結構なことである。

## 2. 昭和三十九年一月二十日付け渋谷秀雄

### 宛代筆書簡

次に、私が入手した谷崎潤一郎の全集未収録書簡を紹介しておく。字体から代筆と推定できるが、文面などから考へて、口述筆記に近いものと推定される。なお、〈その節御無心申し上げました御本〉とは、昭和三十八年十月六日に渋谷第二の子・

敬三が編集・発行した『瞬間の累積——渋沢篤二明治後期撮影写真集』のことである。

\* \* \* \*

〔封筒表〕

東京都大田区田園調布五ノ二三ノ四

渋沢秀雄様

〔切手〕

十円一枚

〔消印〕

小石川 39・1・21 後6―12

〔封筒裏〕

熱海市西山町六一四

谷崎潤一郎（※）

一月二十日

〔用筆〕

封筒・内容とも青インクで、字体から代筆と推定される。ただし、末尾に（※）を付した行のみは黒インクで、自筆と推定できる。

〔用紙〕

LIFEの書簡箋2枚。

〔本文〕

新年おめでとうございます先日はいく

りにお目にかゝり大変なつかしう存じます

したその節御無心申し上げました御本昨日到着早速拝見第一ページの西行法師の木像からして私には忘れ難い思い出のあるものである

は多分今でも大磯に保存されているものと思ひますが永らく見たこともなかったのでそゝろに

昔を思い出しましたその外何一つとして昔を忍ばぬものはなくまことに有難うございました

ました渋沢篤二様にはお目にかゝったことがございましたのであなた様からくれぐれも

お札を申し上げて戴きます重ね重ね有難う存じます寒さがいよく本格的になつ（以上一枚目）

て参りましたからくれぐれも御自愛を祈ります、

右手不自由のため代筆してもらいました失礼をお許し願います、

一月二十日（※）

谷崎潤一郎（※）

渋沢秀雄様

— 227 —

### 3. 中川修造著「人体美と形象芸術」

第参章「人体の運動美と舞踊」

- 3、希臘
- 4、文藝復興期とその後
- 5、現代

最後に、最近入手した中川修造の著書について報告しておく。画家・中川修造は、一時期、谷崎とかなり親しくしていた時期があったと推定されるにもかかわらず、未だに殆ど何も分かっていない謎の画家である。今回、私が入手した中川の著書は、

第四章「人体の美と写真」

「人体美と形象芸術」と題するもので、奥付によれば、昭和二年三月二十日に、芸苑社という所から刊行されている。同じ奥付から、この当時、中川修造は、大阪市住吉区住吉町九三三に住んでいた事が分かる。また、この本に収められている著者の写真(写真1)から、後に中川が担当した「黒白」の挿絵で、主人公・水野の顔(写真2)が、中川本人とそっくりに描かれている事が判明する。

というもので、本文は約百ページ、絵画・彫刻の写真二十二葉と、全裸の男女を用いたヌード写真四十四枚が含まれている。本書の趣旨は全く真面目なものであるが、これらのヌード写真は、検閲に引っかけられる恐れがあったため、出版に際しては、小部数を会員制で配布する形式を取ったらしく、奥付に「人体美と形象芸術(全) 会費金六円」とあり、通し番号を書く欄も設けられている。

この本の内容は、

この著書から分かる事は、残念ながら以上で尽きているが、

#### 第壹章「形態の美」

#### 第貳章「形象美術の上に表れたる人体美」

- 1、埃及

- 2、アツシリア

今後調査を続行し、いつの日か、中川修造の正体を明らかにしたいと思っている。以下、この機会に、現在までに得られた中川についての情報を纏めておきたい。

谷崎と中川とが初めて知り合った時期は確定できないが、昭和二年一月から「苦楽」に連載された「ドリス」が、初めて中

川に挿絵を依頼した作品であり、大正の末に知り合ったと推定できる。なお、中川は、新村出が更生園から昭和二年五月に刊行した『船舶史考』の装幀も、何故か担当している。

谷崎が次に挿絵を依頼したのは、『黒白』で、昭和三年三月十九日に『大阪朝日新聞』に掲載された筆者不明の予告には、次の様に書かれている。

（前略）挿絵を担当する中川修造氏は山元春挙氏の門を出で、更に洋画を研究し、奔放挺はれざる筆を展べてある新進の青年画家で、作者谷崎氏が「自分の小説の挿絵家」として広く求めて選びだした逸材であります。『黒白』の挿絵家として蓋し人を得たものと作者も極力推薦し、中川氏自らも必ずこの雄篇を生かすとの固い確信をもつてゐます。（後略）

この文面からも、無名画家だった中川を、谷崎が何とか引き立てようとしていた努力の跡が、窺い知られるように思う。

中川が、友人の妹尾健太郎を谷崎に引き合せたのも、妹尾の『猫のとりもつ縁』（谷崎潤一郎文庫『月報2』）によれば、まだ岡本梅ヶ谷の谷崎邸（仕事場として借りていた農家井上とみ方）が増築される前だったと言うから、恐らくこの頃であろう。大谷晃一の『仮面の谷崎潤一郎』によれば、妹尾は明治三十七

年生まれだから、昭和三年の時点で数え年二十五歳という事になる。中川も、その前後の年齢だったのではないだろうか。

昭和三年四月十八日付け中根駒十郎宛谷崎書簡には、『黒白』の連載終了後、『朝日新聞』夕刊に連載する予定だった『阿波の鳴門』（百五十枚程度）の初めの数回分は既に書いていて、中川の挿絵も出来ている、とある。また、翌昭和四年十二月七日付けの鳴中雄作宛書簡（水上勉『谷崎先生の書簡』所収）では、『吉野葛』の前身である『葛の葉』と『三人法師』を和本綴にして出したい、（絵は私の方で、大阪の若い絵かき中川と云ふ人に頼んで五六枚入れます。この謝礼は私が出してもかまひません）と言っている。（謝礼は私が出しても）と言うのは、谷崎がバトロンのなって、無名な中川を引き立てるという意志の表明であろう。相当の惚れ込み方である。

この頃の谷崎と中川の交際ぶりを僅かに垣間見せてくれるものに、岡成志の『婦人記者テマ子』（昭和十一年二月刊、アトリエ社『現代ユーモア小説全集』第10巻『誰にも秘密がある・階段のある恋愛』所収）がある。これは小説であるから、一応フィクションと見なければならぬが、かなり事実を忠実になぞっている部分もあるらしく、登場人物のモデルは大抵、見当が付く。例えば、『田崎氏の招待』という章に、作家・田崎潤三

郎が中川テマ子の西日本新聞社への入社を大変喜び、或る日、テマ子とテマ子より一年早く大阪女子英学院を出て毎朝新聞学芸部記者になっていたその親友・太田すま子、テマ子と新聞社で同僚の小山清四郎、それに若い洋画家・中原豊治を自宅に招く場面がある。ところが、古川丁未子の親友だった高木治江の『谷崎家の思い出』によれば、丁未子は、昭和四年春、大阪女子専門学校英文科を卒業後、関西で新聞雑誌の婦人記者になりたいと谷崎に頼み、谷崎が友人で関西中央新聞社論説委員だった岡成志に電話で強引に頼み込んだ結果、翌日採用が決まったと言う。そこで、かれこれ対照して見ると、作家・田崎潤三郎は谷崎潤一郎、中川テマ子は古川丁未子、西日本新聞社は関西中央新聞社と見当が付く。小山清四郎は、岡成志の岡を小山に、成志を清四郎に変えたものであろう。また、太田すま子のモデルは、丁未子より一年早く大阪女子専門学校英文科を出て朝日新聞社社会部記者となっていた隈野滋子と推定できる。恐らく彼女の愛称が「オスン」だったことから、太田すま子という名を思い付いたのであろう。とすれば、若い洋画家・中原豊治は中川修造と推定して間違いないだろう。ただ、作中で、中原豊治は芦屋に住んでいて、丸善で個展を開き、テマ子の肖像画を「T子の像」と題して出品した事になっているが、この辺

(写真2) 『黒白』挿絵

(写真1) 中川修造の写真

になると、どこまで信用していいのかわからない。

これ以降、潤一郎は、昭和六年四月二十日に改造社から刊行した「出」の装幀を中川に任せ、更に昭和十一年四月十八日に日本評論社から刊行した「鶉鴒隨筆」の表紙意匠を中川に、犀浮彫を妹尾に任せているが、これを最後として、中川修造の消息は分からなくなる。

こうして見ると、谷崎と中川の関係は、大正十五年頃から始まり、昭和三十四年頃にピークを迎え、以後急速に冷え込み、昭和十一年頃に絶えた事になる。その原因については、勿論、憶測の域を出ないが、一つには、谷崎の所謂日本回帰の結果、洋画家・中川修造の出番がなくなってしまった事、また一つには、谷崎が松子との関係を深めるにつれて、古い友人たちは遠ざけられた事、特に昭和十二年十一月下旬、妹尾君子夫人が急死した事で、妹尾との関係も冷却した事、そして一つには、中川は小出楢重や棟方志功のような優れた資質の持ち主ではなかった為、谷崎に飽きられた事、などがあつたのではないかと私は考えている。

### 【付記】

翻刻はしないが、昭和八年十月二日発行の「週刊朝日」秋季

特別号（24巻16号）に、「その道を語る連鎖座談会」の一篇として、「当道」と題する谷崎の談話が掲載されている。

また、昭和二十四年三月発行の「邦楽と舞踊」創刊号には、武智鉄二司会による谷崎・井上八千代・井上佐多の座談会「京舞を語る」が掲載されている。この座談会で谷崎は、「蓬生」は、佐多の強い要請を断り切れなくて書いたものの、うまく行かず、二度と再び試みるつもりがないことを強調している。この雑誌は、谷崎と六代目尾上菊五郎が顧問を務めていて、その旨が表紙に明記されているほか、「邦楽と舞踊」という表紙の題字も谷崎が書いている。

昭和三十八年七月号の「心の花」には、「竹柏百首に寄す」という総題のもと、佐佐木信綱の「竹柏百首」についての諸家の評と共に、「京都より」と題した谷崎の佐佐木信綱宛書簡が掲載されているが、これは全集に書簡60として収録されているものと同じである。